

浄

monthly
JŌDO

土

12

December 2006



法然上人鑽仰会



このたび生死を離るゝ道

浄土に生まるゝに過ぎたるはなし

浄土に生まるゝおこない

念佛に過ぎたるはなし

浄土

2006/12月号 目次

東京でのアイヌ教育	長谷川修	2
寺院紀行特別編 熊谷寺	真山 剛	10
新連載 教えと法話	生野善應	17
巷談元禄グラフィティ	佐々木美冬	18
表紙の言葉	梶谷佳加	27
会いたい人 和田誠さん②	関 容子	28
響流十方	林田康順	36
新江戸を歩く (第二回)	森 清鑑	40
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆猓下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

開拓使仮学校附属

北海道土人教育所 開拓使第三官園 でのアイヌ教育

レラの会会長
「東京・イチヤルパ」実行委員会代表
長谷川修

一八七二（明治五）年六月から八月にかけて、石狩・夕張・小樽・高島・余市から、三十五名のアイヌが上京しました。これは、東京芝増上寺境内に設置された開拓使仮学校の付属機関である「北海道士人教育所」という名称の使設、及び渋谷の開拓使官園において、農業、日本語、算術、裁縫などを学ばせるという、開拓使の政策によるものでした。この計画は、ほとんど成果をあげないうちに、わずかな期間で挫折しますが、後から上京した余市のアイヌ一名、択捉島出身のアイヌ二名を加えると三十八名が、明治初期に東京で日本人教育を受けたことになります。

この計画は開拓使次官（後に長官）の黒田清隆の発案により行われたものですが、周知な計画や準備のもとに行われたものではなく、場当たりの、且ついい加減になされたものと言えます。例えば、実際にアイヌの教育に携わった官員にしても、仮学校の他の部署からの急な転任、あるいは他の職務との兼務でした。このことは、計画のずさんさを示す一例です。

上京するアイヌの募集は、かなり性急かつ強引に成されたもので、また上京したアイヌの年齢や家族構成などから推測して、コタンや一家の主たる働き手を奪うことも意味していました。このことからアイヌの上京は「強制連行」であり、決して「東京留学」といったものではなかったことが明らかです。

上京したアイヌは清光院（江戸末期に開創された増上寺の末寺で明治初年には廃寺となっている）という寺を買い上げて用意された宿舎「北海道士人研究所」で寄宿して、学んだグループと、開拓使第三官園に起居し、農業を学んだグループに分けられます。東京での生活や、教育内容については、明らかにする資料が乏しく、不明な点が多いのですが、

「北海道土人教育所」に関しては「教官」と「土人取締り」と称する官員に、教育に限らず、生活全般について監視を受けていたことがわかります。

そうした生活になじめなかったためか、上京者のうち一名が脱走を試み、見つかった後に故郷へ帰されました。これは、この計画に対するアイヌの側からの拒否の意思表示の一例と言えます。また並行して病人が続出したことも指摘しておかなければなりません。病人の中には函館病院に入院治療を受けた例が多く、治療した後東京に戻った者もいますが一名が函館で亡くなっています。また、病気を理由に途中で帰郷した例があるほか、三名が東京で亡くなっています。上京したアイヌの中から高い比率で病人、病死者が出ているのです。そのためか、体調に不安を感じたアイヌから帰郷を願い出るアイヌが続出し、また故郷の家族が心配であるという理由から帰郷を願い出たアイヌもいました。そして、一八七四年、仮学校に編入した五名を残してほとんどのアイヌが帰郷しました。（そのうち五名は一時帰省という名目でしたが再上京することはありませんでした。）

この事件（出来事）は、アイヌ政策史、教育史において、しばしば取り上げられてきました。そして単なる政策史、教育史上での研究、評価、位置づけではなく、「強制連行」「強制就学」を受けた一人ひとりのアイヌにとってこの事件（出来事）がどのような意味をもつものであったのかという視点は重要であり、欠落させてはならないと思います。特に二度と故郷に帰ることなく、祖先の大地に想いを馳せながら（シンリツモシリ コイチ ヤルパ）亡くなったアイヌにとってこの事件（出来事）の意味は、計り知れない大きなものでした。そして、今生きる、ウタリ（同胞）にとって史実を明らかにし次世代に伝えることの重要性を感じるのです。

今年八月十三日・再び「東京・イチャルパ」実施しました。

イレスカムイ モシリコロフチ オリパクトラ 火のカムイ国土を司るカムイ遠慮と共に
ネワネコロカ タパンヌラツパ であるけれどこれらの食べ物

タパンイチャラパ タパントウキ この供え物 この杯に

オソンココテワ ウンコレヤン 言葉を添えてください。

カムイモシツタ カムイネアングル カムイの国でカムイになった人

クコロシンリツ レコロカトウウ 先祖、その名前は

セガミ ハト ハハモテ (一八七二・十・十三・午後三時)

バンドウ キチ ハハシノミ (死産一八七三・三・二十)

サベ ライジ ハラウシ (函館病院一八七三・七・十七)

ユウバリ ヤスジロウ ハアフンテクル (第三官園一八七四・四・十七)

フルカワ イゴ ハイコリキナ (第三官園一八七四・五・四)

イチャラパ イアレ (先祖への供物を送ることば)が始まり、連行され亡くなった(殺された)アイヌだけでなく三十八人全員の名前を呼び、またさらに近年亡くなったアイヌウタリの名前も呼びました。今回は、イノンノイタツク(カムイへのことば)を日本語で言いました。イチャルパを見守ってくださっている人たちにも、私のことばが理解できるようにと考えたからです。イノンノイタツクをもう少し続けると…(日本語で)

その人へ私は供物を贈りたいと思うのです

アイヌのところでは杯にいっぱいだけ贈っても カムイの国へ

着いたならば大きな酒樽に溢れるほどに増えて届くはず

穀物やその他の供物、食べ物、果物、煙草などたくさん供物が大きな荷物

大きなかますに詰まって着くでしょう

カムイの国で とうなるかといえは杯を受け取ったアイヌ（人）が

最も親しい人たちを招待し 酒宴が 素晴らしい酒宴が開かれることになっています。

そうすることによってカムイの国へ帰った先祖たちの後で暮らしている

私ども大勢の仲間がいつまでもアイヌの血統 絶えることなく

繁栄する そして幸せに暮らせるように

カムイの国から見守ってくださることを思います

私たちが行かう東京・イチャルパは、多くのウタリにことばを掛けるだけでなくカムイの国に帰ったアイヌにことばを掛け、共に過ごす時を体験させるものであります。始まるべきの緊張感はだんだんほぐれてこの場に居ることが嬉しくなります。不思議な時間です。

ピリカ クニ クラム アヌタリアイヌ 私たちアイヌが人間らしく

アイヌネノシク カイクニ 生きることが出来るように。

私たちの決意、願いをことばにし、先祖たち、カムイと約束してことばを終えます。

カムイノミが続いている限りアペオイ（炬）には火が消えることはありません。イチャルパを支え続けているのが火のカムイ（アペフチカムイ）だからです。

今まで意識してこなかったこと、今回気が付いたことがあります。それは、二〇〇七年は、ポヌヌサ（小さな祭壇）にイナウ（御幣）を38本+10本+aを作り一人ひとりに私たちの想い、ことばを伝えようと思います。

東京・イチャルパは先祖供養だけではなく、アイヌ民族の精神・文化伝承の場としても位置づけてきました。今年は、阿寒、釧路、帯広のフチ（おばあさん）五人に来て頂き、若いアイヌへの伝承活動も行いう事が出来ました。本来ならば日常活動として伝承は続けられるのですが現在、首都圏では伝承者が居ないこともあり難しくなっています。その意味で大切な時として続けて行きたいと考えています。

「開拓使仮学校付属北海道士人教育所」に関する資料集が出版されます。

資料集の出版については、長年願ってきたことですが私の能力では不可能なことなので諦めていたのですが、研究者（広瀬健一郎氏、狩野雄一氏）の協力そして、東京のシサム（良き隣人）の方々（アイヌ民族の権利回復を求める会）の後押しがあり来年三月までには出版出来る見通しがつきました。資料集の出版で終わるのでなく新たな問い掛け（チャランケ）検証をしていかなければならないと考えています。強制連行、強制就学を背景とした「土人教育所」に留まらずアイヌ民族全史を明らかにして、アイヌ民族の尊厳の回復、そして権利の回復に繋げていきたく考えています。

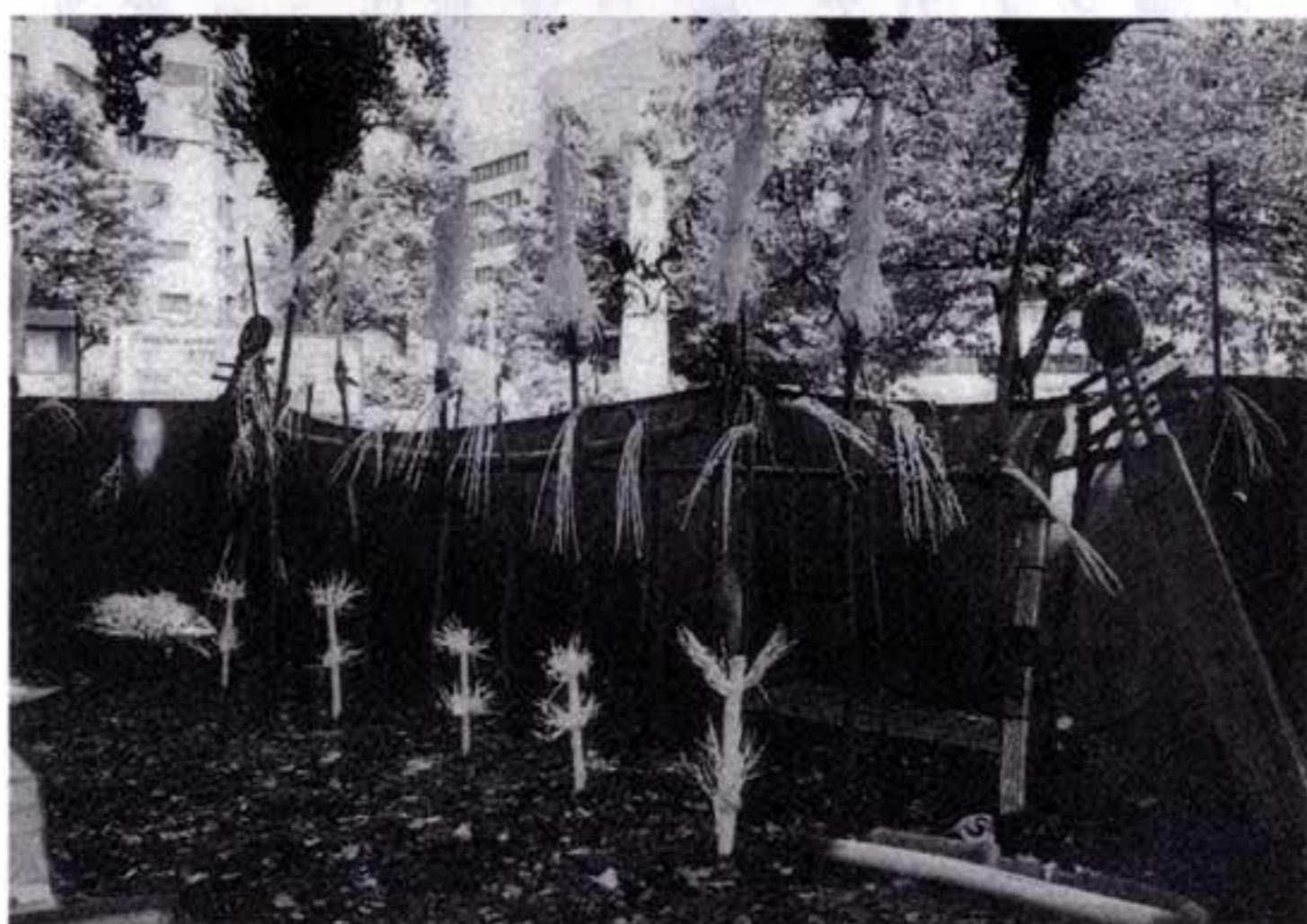
多くの方々に、是非一読していただきたく思います。

※注

私のひとつのこだわりとしてアイヌ民族のカムイノミ、カムイの尊敬、精神世界等をことばなり、文章にする時に「宗教」、「神」、「祈り」等の文言を意識的に使わないように心掛けています。それは日本語からイメージされるものを意識的に拒否したいからです。それならばむしろアイヌ語をそのまま表記する方が良いのではないかと考えるのです。私の身勝手な抵抗ですが、ご理解ください。



「開拓使仮学校跡」石碑 現在港区芝公園内4号地(元増上寺境内)

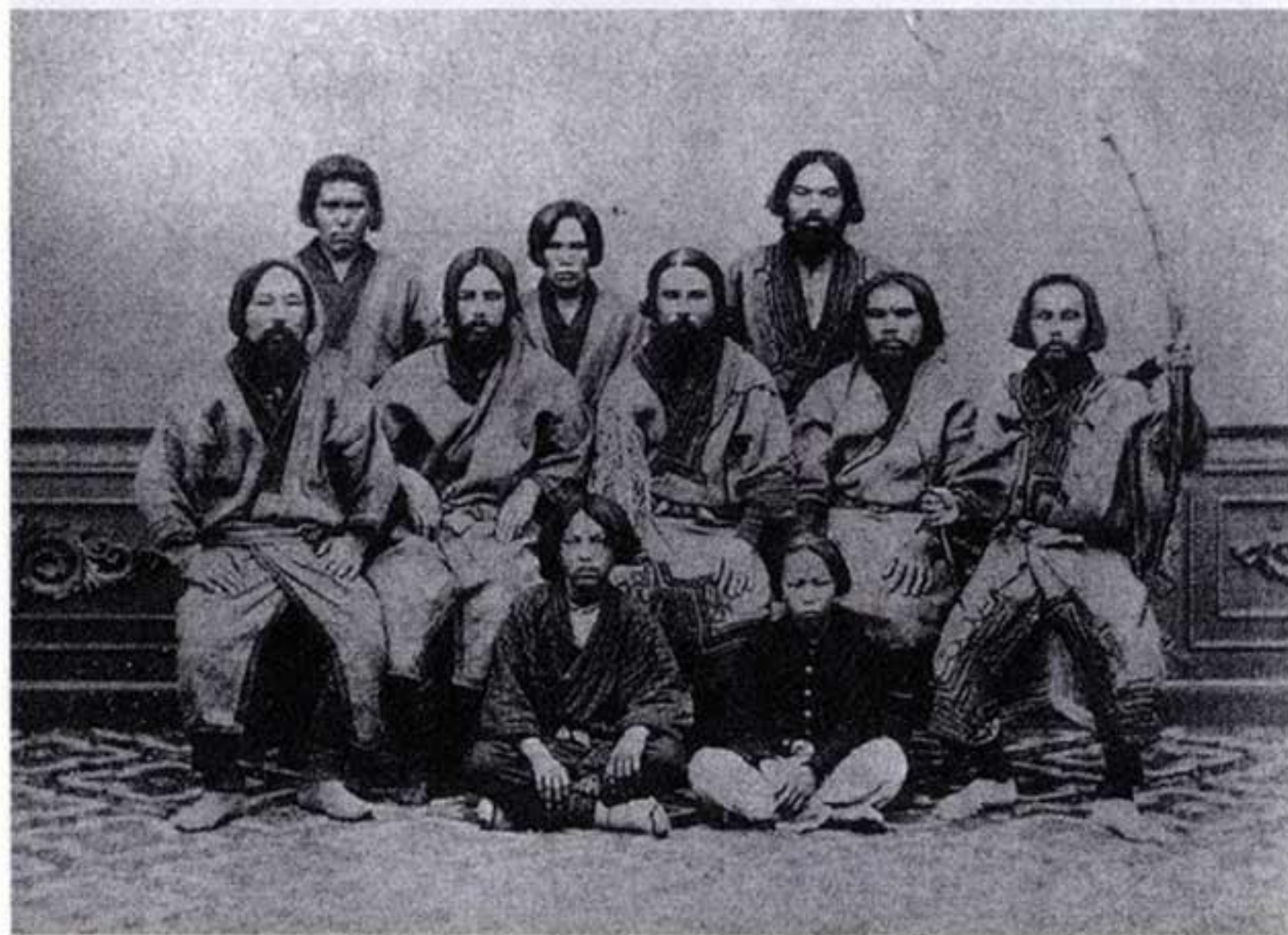


2006・8・13「東京・イチャルパ」のときのポンヌサ リ・コイチャルパ」のときのポンヌサ シンリツモシ

「開拓使仮学校付属北海道士人教育所」の女子生徒（1872）
於：北海道大学付属図書館北方資料館



「開拓使仮学校付属北海道士人教育所」の男子生徒（1872）
於：北海道大学付属図書館北方資料館



寺院紀行

特別編

蓮生法師（熊谷直実公）、
御巡錫・法然上人御分身と再会す

埼玉

熊谷寺

蓮生法師八百年遠忌法要
に参詣して

真山剛

（ルポライター）



熊谷寺本尊前での八百年ぶりの師弟対面。左が熊谷寺に残る蓮生法師自刻の坐像。右は法然上人御分身。（写真協力／浄土宗文化局）

「板東の阿弥陀仏」、法然上人は弟子の一人である蓮生法師をこう呼んだ。

浄土宗の教えは南無阿弥陀仏と称えることだが、その阿弥陀仏の名で呼んだというのだから、法然上人がどれほどこの弟子を大切に思っていたかがわかる。

その蓮生法師に御分身となった法然上人が会いに来られた。時は平成十八年十月二十四日、所は埼玉熊谷の熊谷寺。ゆうこくじ

このお寺は五年前の平成十二年に寺院紀行で訪れた名刹で、このシリーズでは初めての再訪となった。

さて、法然上人には多くの弟子がいたが、その中には関東武士たちも多かったが、その代表が蓮生法師こと、熊谷直実公である。くまがいのなおさねこうこの熊谷直実公が往生したのが、一二〇七年、承元元年の十月二十四日巳の刻で、六十七歳だった。自らの往生を宣言し直実公が衆人の前でその素懷を遂げた時、七十五歳の師、法然上人は四国流罪中の身だった。愛弟子が往生した知らせを聞いた時の法然上人の様子を伝える資料はないそうだが、おそらく可愛い弟子の他界を悲しみ、そして往生を喜んだに違いない。その法然上人も五年後に八十歳で往生しているから、この師弟の往生の間には五年のずれがある。当然年忌法要も五年ずれる。

つまり、今年平成十八年が熊谷直実公の八百回忌にあたり、平成二十三年が法然上人の八百回忌ということになる。読者の多くは浄



対面を待つ御分身の両脇で、右が総本山知恩院八百年遠忌事業部長、吉水裕光師、左が大本山増上寺執事、石田祐寛師

土宗関係者のみなさんだから、法然上人の八百年遠忌^{おんき}はご存知に違いない。そしてこれも読者には周知のことだが、生前中には関東に足を運ばれることのなかった法然上人だが、この八百年遠忌事業のひとつとして総本山知恩院で法然上人の御分身が作られ、その御分身が全国を回られる御巡錫^{じゆんしやく}が始まり、ついに箱根越えが実現した。そして今回の熊谷寺への御巡錫は、教区という組織が御巡錫を初めて招致したもので、浄土宗埼玉教区が熊谷寺の蓮生法師八百年遠忌に合わせ、法然上人の御分身をお呼びしたというわけである。これに加わえ、埼玉教区では法然上人の八百年遠忌に向け「お念佛のつどい」を開催しており、このつどいも重ね合わせた、まさに法縁満ちる日、となったのである。

この一日の行事をお知らせするのが、今回の寺院紀行だが、進行予定を注釈付きで記す。

熊谷蓮生法師八百年遠忌

お念佛のつどい

法然さまとのご対面

平成十八年十月二十四日（火曜日） 午後一時開式

蓮生山常行院熊谷寺



熊谷寺本堂に一堂される法然上人御分身

〈式次第〉

開会挨拶（知恩院遠忌事業部長・埼玉教区長・埼玉教化団長・埼玉

教区第四組浄土宗寺院檀信徒会会長・熊谷寺住職）

法話（布教師）

道場洒水（埼玉教区青年会会長）

御巡錫（法然上人お練りの後、本尊前の蓮生法師像と並んで安置）
法要

（第一部） 遠忌法要

熊谷寺住職導師

・五奉請（弥陀世尊・釈迦如来・十方如来・法然上人・蓮生法師）

「熊谷寺の御詠歌」奉納などの特別差定

（第二部） お念佛のつどい

埼玉教区第四組組長導師

・別時念仏、「蓮生法師御和讃」奉納などの特別差定

挨拶（増上寺執事）

戒壇巡り（本堂地下の真つ暗な廊下を巡り、本尊と縁を結ぶ）

パネル見学（「熊谷陣屋」など直実公の歌舞伎舞台写真を展示）

寺宝公開（蓮生法師ゆかりの寺宝を展示）

※「熊谷寺の御詠歌」、「蓮生法師御和讃」は詠歌が蓮生法師作詞、和讃が熊谷寺副職作詞で作曲はともに松涛基道師、ともに新作で浄土宗の公認詠歌、和讃に申請中とのこと。

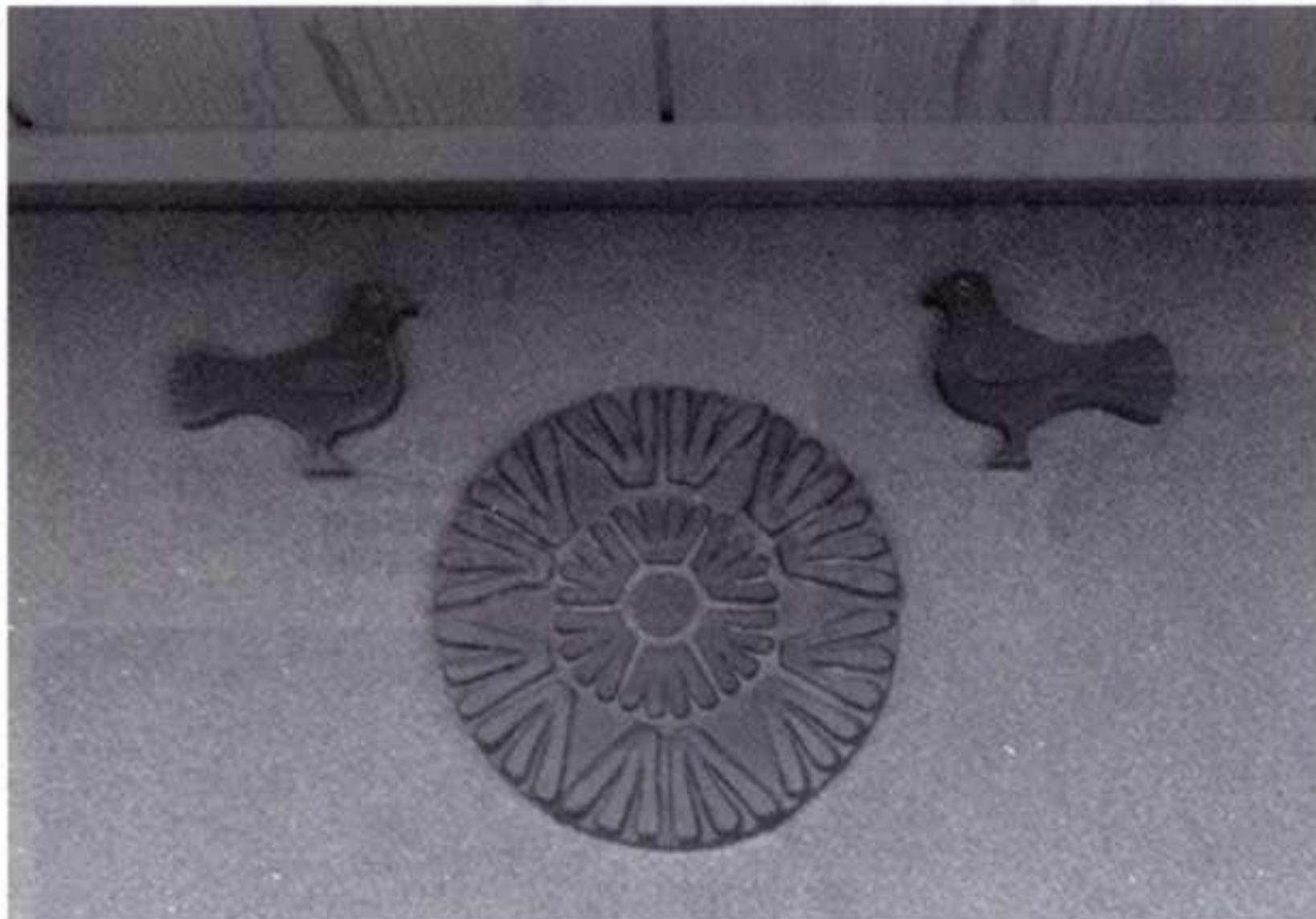


埼玉教区青年会の僧侶たちによって法然上人御分身は熊谷寺本尊阿弥陀如来像の前で蓮生法師自刻の像と対面をはたした。左は漆間住職導師の法要の様子





五十年前の七百五十年遠忌の時の写真。
逆さ馬の行列があった



熊谷直実公は鳩の家紋をもらっている。銀座鳩居堂が
直実公の子孫であることは本紙10月号に詳しい

という式次第だった。素人にはわからない専門用語もあるが、最後まで含めると四時間をこえ、お坊さんが四十名以上、お世話をしてくれるご婦人方、そして約二百名を超える参詣者を合わせると総勢二百五十名を超える大きな行事なのである。

そして、式次第をご覧いただければわかるが、埼玉教区挙げての一大行事となり、熊谷寺のある組（第四組といって埼玉県の西北部）のお寺はもとより埼玉教区の役職者や他組からお手伝いにこられていた。

これだけの行事にあたって大変だったのが、熊谷寺のしつらえだった。間口十四間、奥行十六間の大伽藍は収容には申し分ないが、なにせ古い建物ゆえ、展示物を見せるためにランプで明るさを確保したり、法然上人のご分身を迎える控え室の畳替え、と準備に大わらわ。それに加え、習礼という実際の法要と同じ練習を一か月以上前から三回も行っている。

行事が終わり、来賓も帰られた後、一息つかれている住職に声をかけさせていただいた。

「お久しぶりです。その節はお世話になりました」

漆間和美住職は、ありがたいことに六年前の取材を覚えておられ、開口一番、丁寧にご挨拶をいただいた。そしてこう続けられた。

「実は八百年遠忌の事業として、本堂の屋根の修復を考えていたの



当日はあいにくの雨だったが、参道の蓮生法師像が参詣者たちを出迎え、そして見送られた

ですが、なにせ大伽藍ですから見積りが予算を越えてしまった。そんな時に埼玉教区の方々から遠忌法要へのご提案をいくつかいただいたのです。

蓮生法師の八百年遠忌は当寺にとつては大切な法要ですが、その提案のどれもが魅力あるもので、屋根の修復は忘れてしまいました(笑)。でも、こうして法然上人をお迎えできたうえに、念仏もみんなで称えられる。そしてみなさんと一緒に遠忌法要のご回向させていただけたのですから、蓮生法師も喜んでおられるに違いありません。有り難いことに以前に取材された時から、色々な行事を始めたこともありますが、最近檀信徒さんの念仏の声が本当に大きくなったのですよ」

前回取材させていただいた時は熊谷寺の名前を悪用するような人がいたこともあり、お寺の行事を控えていた頃だったのを思い出した。それを思うと今回の八百年遠忌法要がまた明日の新しい熊谷寺につながっていくきっかけにもなるだろう。

本誌十月号の八百年遠忌記念としての熊谷直実公特集に詳しく直実公のことが記してあり、蓮生法師、熊谷直実公が上品上生じょうほんじょうしやうを願い、私たちを救おうとされていたと書かれていたが、まさに今回の行事は極楽で喜んでいられるどころか、板東の阿弥陀仏・蓮生法師自身が私たちの見えない力で導いたものなのかもしれない。



谷崎隆光師が熊谷直実公にまつわる説教をされ、後ろには「熊谷陣屋」などの歌舞伎の舞台写真などが展示された。左は参詣者に挨拶される熊谷寺漆間住職



俱く會え一い處つ

ともに一処にてまみう
阿弥陀經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

縁あつて、同じ時代、同じところにいる私たち。
仲良くしよう。

人を含めて、一切のものが縁すなわち関係性で成り立っているというのが、仏教の根本思想です。現在、地球上には約六十五億の人がいるそうです。厳密に言えば、私たちは世の中のすべての人と関係があるわけですから、そのなかかけが

えのない人間関係、夫婦、親子、兄弟、友人、仕事仲間のつながりは、六十五億分の一の出会いでできたもの。かけがえのない縁は仏のはからいを受けとめ大切にしなければならぬと思います。

佐々木美冬
コラムニスト・蓮門小子

巷談

元禄

グラフィティ



元禄二（一六八九）年、俳人、松尾芭蕉は北への旅に出る。

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり」の有名な出だしで知られる『奥の細道』への旅立ちである。芭蕉はこの頃すでに俳聖と呼ばれていた。

野ざらしを心に風の沁む身かな

旅人と我が名呼ばれん初時雨

身にしみて大根からし秋の風

など『野ざらし紀行』や『笈の小文』『更科紀行』などの吟行句も定評が高いが、なんといっても、江戸在中の一句、

古池や蛙とびこむ水の音

この句の与えた衝撃度が凄まじかった。この国の詩歌において、蛙が詠まれるとすれば、それは「声」であった。「鳴き声」であった。それがガオガオなのかケロケロなのか、いずれにしろ、旅情や寂寥、孤独をあらわす符号のようなものであった。しかし芭蕉は蛙一匹の個体の音を詠んだ。実在を詠んだ。

この句を真似ようとして後代の俳句好きが「古池」へ出向いて張り込んだという。彼はじっと待った。ひたすら耳を澄ませた。しかし一週間待っても一ヶ月待っても蛙の飛び込む音など聞えなかった。

そこで彼は一句捻った。

古池やその後とびこむ蛙なし

もちろん、これは江戸の冗談好きが作った「お話」である。「嘘」である。しかし、ここでは江戸の初期中期がどんな時代だったかを知ってほしいためにあえて書いた。粹な時代なのである。冗談に生涯を賭ける人すらいたのである。

筆者の知人に斉田仁という俳人がいる。この人いま六十七歳。彼はこう詠んだ。

古池や俺がとびこむ水の音

ああ、なんたることか。これでは自暴自棄である。しかし筆者は大笑いさせられた。泣きながら笑った。俳人ではない、俳諧師の手口である。「元禄」の気風は現在にも生きて

いるのである。そのことが矢鱈^{やたら}に嬉しかった。

■江戸っ子の始まり

さて話を芭蕉に戻す。この門下には逸材が揃った。去来、嵐雪、杉風、丈草、支考、北枝、許六、曾良などなど。蕉門の十哲などと呼ばれた。しかし筆頭は誰がなんと言おうと其角である。榎本（宝井）其角。

この男、十四歳で入門。早熟の天才で、江戸生まれ。いわば江戸っ子の走りである。

其角から見て芭蕉は伊賀上野からやって来た田舎のお爺さんみたいなのである。風雅、侘び寂び、軽ろみ、といった芭蕉の説く俳味について、なんだかなあ、といった体で見ている。彼の句は闊達、雄渾といえ、ほめ言葉だが、派手、けれん、新奇を衒い、そして軽妙諧謔、いわば洒落のめした面白さに満ち満ちている。

これが江戸の気質に合うのである。だから人気があった。そこが他の弟子には不満だった。



たとみえて、其角はあれでいいのか、ということになる。ところが、他の弟子の句作には細かく精緻に厳評する芭蕉が、この男にだけは文句をいわない。あれはあれでいいのだ、という風であった。

生き方も違う。芭蕉は生涯漂泊の旅人として生きるが、其角は旅なんかしなくても名句はできると思っていた。その其角が二度ほど大坂へ旅をしている。

大坂には井原西鶴がいたからである。西鶴は俳諧で名を売りたくて仕方がなかった。西鶴の俳句は芭蕉のように推敲を重ねて発する

乾坤一擲のような句ではない。矢数俳句といって、たとえば一晚に千句作ったらすごいだろう、という即吟。これを舞台で行う。観客を呼び、数を数える者、筆記する者、万が一のために医師までを置くという、演出に演出をこらした俳句マラソンともいうべき「興行」である。俳諧の余技に書いた『好色一代男』など幾ら有名になっても気が晴れない。この時代、小説などというものは女子供の読むものの、男の美学は俳諧なのである。

其角はこの西鶴の「興行」の後見を依頼される。其角は引き受けた。面白そうだったからである。面白いことには目が無いからである。一方、江戸一番の人気俳人、其角を招くことができて、西鶴は喜んだ。素直に嬉しかったのである。そして独吟四千句、一昼夜二万三千五百句などに挑戦し、成功したとき、気が緩んだのか、其角にふと「ところで江戸の芭蕉ってのはどうなの」みたいな聞き方をしたのであった。

嫉妬めいた、揶揄の混じったその問いに、其角は突如、びしっと背を正し、「桃青（芭蕉の若い頃の俳号）これ全身俳諧なり」と言い放った。つまり西鶴さん、あんたなんか問題じゃないよ、という意味である。ここぞというときは師、芭蕉の俳諧の凄さを言い切る。其角面目躍如の一話である。

その西鶴は元禄六年、芭蕉は元禄七年、相次いでこの世を去る。

■十八人斬り

元禄七年の江戸最大の事件といえ、決闘高田馬場である。

念流堀内道場の師範代、中山安兵衛は酒豪でもあり、ある夜いつものように酔いつぶれていた。翌日、昼近く家に戻り伝言を見て、同門の菅野六郎左衛門の危機を知る。場所は高田馬場。藩主の御前試合での遺恨による果し合いだという。菅野と叔父甥の契りを結んでいた安兵衛はもちろん助っ人だ。走る、走

る。案の定、相手は卑怯にも数を頼んだ騙し討ち。菅野を四方八方から取り囲んでいた。

そこへ安兵衛が斬り込んだ。一気に形勢逆転。これがのちに「高田馬場の十八人斬り」といわれる剣豪伝説を生むことになる。

学者の考証によれば十八人というのは誇張らしい。二、三人、せいぜい五人など異説百論が出たが、現在では四人という説が有力であるとか。そんなことより中山安兵衛、これで江戸一番の人気者となった。圧倒的な超人気アイドルの誕生である。若い娘がきゃーきやー騒ぐ。年頃の娘を持つ男親はもっと現実的である。うちの娘婿に欲しいという問い合わせが集中した。ありとあらゆる縁談が殺到した。

そのなかで安兵衛が決めたのが、堀部家である。しばらくは中山姓を名乗ることを条件に、赤穂浅野家の家臣、堀部弥兵衛との養子縁組を承知したのである。まさか数年後、赤穂藩にとんでもない大事件が起きることなど

義父、娘（妻ほり）、養子ともに誰も想像だにしなかったのであった。

■三宅島の絵師

絵師、英一蝶は変わり者。お上に狙われやすい男であった。生来、奔放。絵画技法は狩野派だが二年で破門になった。以後、町絵師としてもっぱら遊郭に通い、幫間まがいの芸風で、豪商、大名の座をとりもった。

医師の息子同士ということもあり、派手な放蕩三昧とくれば、例の其角とは当然、大の仲良し。暁雲という俳号をもって、其角の句会に参加し、ともに句作を楽しんだ。其角は彼の俳諧の才を高く買って、師の芭蕉にも紹介している。

ときに五代將軍綱吉の時代。元禄文化のあまりに華美な展開を快く思わなかった幕府は、大名旗本の遊郭通いを禁ずる。元禄六年、英一蝶は入牢。たいした罪ではなく見せしめのような逮捕劇であり、二ヶ月で釈放。



だが、こんなことでは懲りない男である。

批判精神旺盛、ますます意気軒昂。そんなわけで、元禄十一年、今度は三宅島に流島となる。表向きは「生類憐みの令・違反」の罪だが、一蝶の作品が側用人柳沢吉保の、娘を担保にした小賢しい大出世を風刺したから、というのが本当のところらしい。

民の文化は鮮やかに花開くのに、政治は膿んでいくのである。

三宅島といえば「くさや」が名産。その「くさや」が江戸湾に陸揚げされるたびに、海辺に通う其角の姿があった。一蝶が島送り

になる寸前、「くさやの口に笹の葉が挿してあったら俺は元気だと思ってくれ」と其角に言い残したからである。其角は笹の葉の挿された「くさや」を見つけ、そのたびに安堵の涙を流したのであった。逆に三宅島への差し入れはもっぱら絵の具。罪人の身でありながら一蝶は絵を描き続け、この期の活写は特に「島一蝶」と呼ばれて後世に伝わっている。

ところで一蝶が暁雲の俳号で参加していた其角の座には豪商、武士も沢山いた。たとえば千山の号で紀伊国屋文左衛門など。そのなか播州赤穂藩の武士がなかなかの才気を発揮して目立っていた。

俳号、子葉。

すなわち大高源五忠雄である。

■赤穂事件

一代の隆盛を誇った元禄期もだんだんに押し詰まって来て、ときは元禄十四年。

三月、江戸城本丸御殿、松之廊下において

大事件が勃発する。刃傷にんじょうである。斬りつけた

のは播磨国赤穂藩藩主、浅野内匠頭長矩、斬られたのは高家旗本、吉良上野介義央。

さて、ここからはあまりに有名な忠臣蔵の世界、これ以上詳説しないが、幕府の裁決があまりに拙速。浅野切腹お家断絶、吉良お咎め無しという結果には判官贔屓の庶民が納得しない。

とまれ、こうした世論をバックに、翌年、浅野の遺臣、大石内蔵助良雄以下四十七士の吉良邸討入りとなるのだが、その前日のことである。

もはや押しも押されぬ江戸一番の俳諧師、宝井其角が両国橋の橋詰に差し掛かると、向こうから見た顔がやって来る。誰かと思えば子葉である。笹売りに身を賣やっしてはいるが、お家断絶以降、浪人となった、あの大高源五である。ま、このあたり、あんまり史実と思わないでほしい。『松浦の太鼓』という芝居に描かれている情景だが、名場面は名場面。

元禄という時代の風を感じ取ってほしい。空気を吸ってほしい。それでいい。

さて久しき邂逅を懐かしんだ二人のその別際、其角は、はなむけに、

年の瀬や水の流れと人の身は

と上の句を詠む。すると子葉大高源五、

あした待たるるその宝舟

と返したのである。

このあたり、そのかみの明智光秀、本能寺急襲前の連歌を髣髴ほうふつとさせるではないか。ところで、源五はかなりの才人である。俳諧のほか茶道にも通じていて、『茶道弁蒙抄』を著した山田宗偏の門下でもあった。この山田Ⅱ大高情報ルートともうひとつ羽倉斎・大石三平ルートの二つによって、十二月十四日、吉良邸に茶会があり、夜は間違いなく上野介在宅の確証を得たのである。上野介義央は茶人として有名である。上野の上の文字を二分してト一という号があり、みずからト一流を興すほどの風流人である。江戸中名だたる茶

人の集まるこの日、居ないわけにはいかないそれが元禄なのである。

さて忠臣蔵外伝『松浦の太鼓』に戻る。其角はその夜、吉良邸の隣屋敷、松浦候に出向して俳諧教授などするのである。しかし、どうも句作に身が入らない。赤穂浪士の仇討はあるのか、ないのか。雪見酒に両国橋のやり取りを語るうち、俄かに鳴り出す陣太鼓。

三丁陸六ツ、一鼓六足、天地人の乱拍子。

「や、あれはまさに山鹿流の陣太鼓！」

赤穂の武士道見事。さあ、助太刀だ、応援だ、観戦だ、という大騒ぎになる。吉良の首級を挙げ、本懐を遂げたのち、討入り装束に身を固めたままの源五、観客其角の前に駆け寄り、付け句に籠めた意味を理解してくれたことを喜ぶ。そして、其角の所望に応じて、一句。

山を抜く力も折れて松の雪

源五、天っ晴れ。の掛声のひとつも掛けたいではないか。

■それぞれの辞世

吉良の首を取り本懐を遂げた赤穂浪士は、それぞれ指定の大名屋敷に預けられる。

結局、全員切腹という決定、それも覚悟の上のこと。膿んだ政治への異議申し立てという筋は通した。この世に未練は無いのである。だが、それぞれ強面の武士とはいえ、同じ元禄の風雅に生きた男たちである。多くは辞世を残している。

細川家預かりの吉田忠左衛門兼亮、

君がため思ひぞ積る白雪を

散らすは今朝の嶺の松風

同じく細川家預かりの原惣右衛門元辰は討入り前に母親が、義拳を励ますために自決したこともあって、

かねてより君と母とに知らせむと

人より急ぐ死出の山路

無口で温厚だったが、文武両道に秀でた間喜兵衛光延の辞世。

草枕むすぶかりねの夢さめて

常世にかへる春のあけぼの

和歌ばかりではなく、句もある。放水の俳号を持つ、松平家預かりの岡野金右衛門包秀。

その句ひ雪のあしたの野梅かな

そしてご存知、子葉大高源五忠雄。

梅で呑む茶屋もあるべし死出の山

水野家預かりの神崎與五郎則休は俳句では大高源五と並ぶともいわれた。

梓弓春近ければ小手の上の

花をも雪のふぶきとや見む

それぞれ素養を感じさせて、実に味わい深い。襟を正して読まねばならない。瞑目せざるを得ない。そして思わず胸が熱くなる。

さて、四十七士の掉尾を飾るべきは、なんといっても、大石内蔵助良雄であろう。一般には、討入り後、旧主浅野内匠頭の墓前に吉良の首級を捧げたときに詠んだ一首を辞世としている。それは、

あら楽し思ひは晴るる身は捨つる

浮世の月にかかる雲なし

なのであるが、実際、切腹寸前に遺したとされるもう一首がある。その辞世の歌を紹介してこの稿、巷談元禄グラフィティのお粗末な一節を閉じることとする。

極楽の道はひとすぢ君ともに

阿弥陀をそへて四十八人

(了)



2006

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんのぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしたい童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

1970 奈良県生まれ

1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学

1989～入選歴

中日国際ビエンナーレ、京展、関西展

奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展

1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了

1997 滋賀県大津市山中町に独立

<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>

12月号は お地蔵さま

お地蔵さまの信仰は、仏教のなかでも一番親しみやすく広まった信仰です。石仏が多く、その造形が菩薩の形から僧侶の姿へと変ったこともその一因でしょう。衆生の苦しみを救い、賽の河原では子供を守る守護役でもあります。苦しみを肩代りしてくれる身代わり地蔵に始まり、泥付地蔵（田植え）・矢取地蔵・縄目地蔵・延命地蔵・子育て地蔵・腹帯地蔵・とげぬき地蔵・水子地蔵などなど。

京都には高山寺と関係する二面のお顔を刻んだ地蔵があります。関西加茂には地蔵二面磨崖仏、また金沢野田山墓地にも反対向きの二面地蔵があります。

表

紙

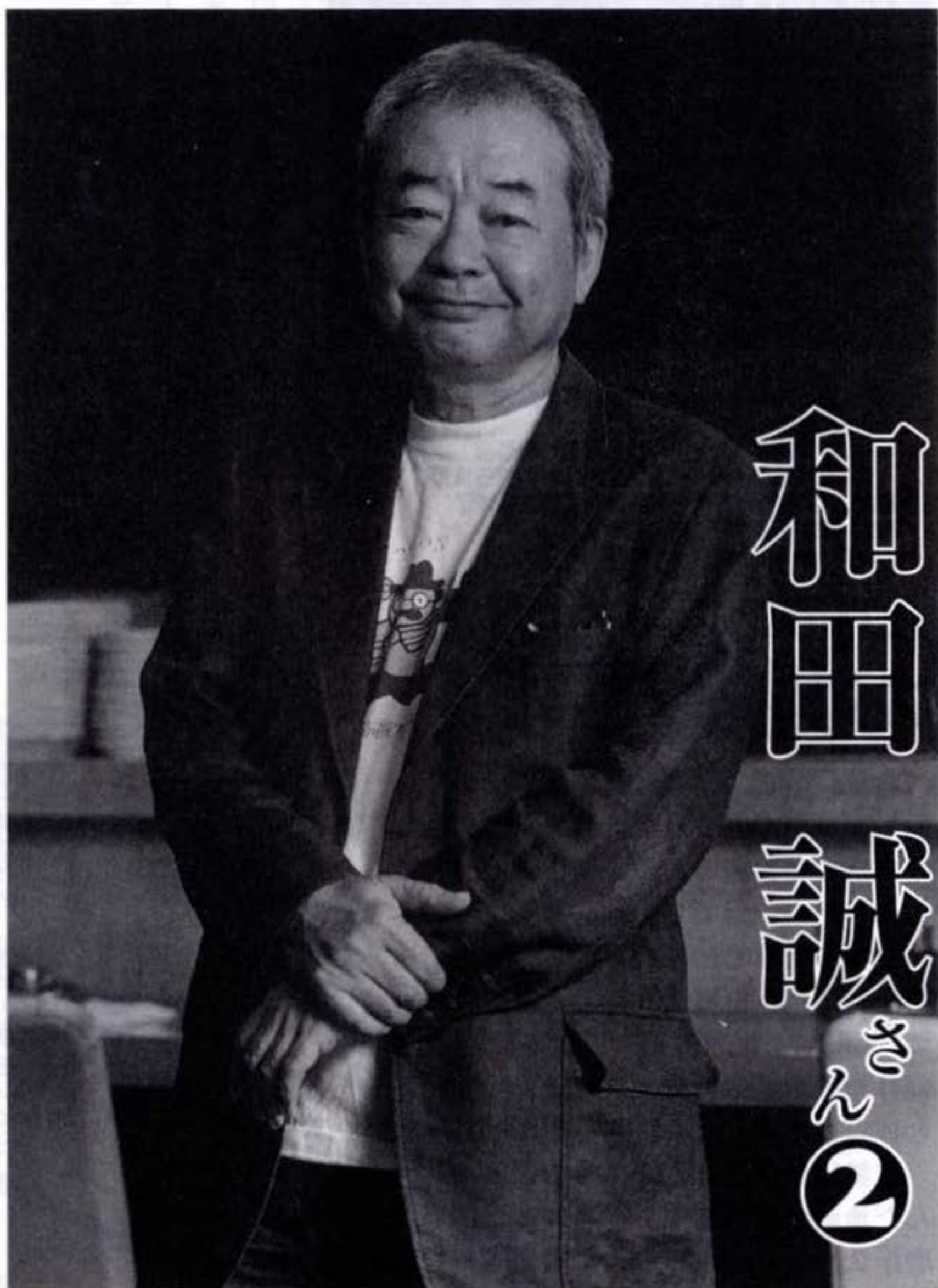
の

言

葉

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

小学五年生の和田さんが、清水崑の政治マンガによって触発された、という話には後日譚があった。

「三十代になったころ、小学校のクラス会があつて、先生が清水崑のマンガが素晴らしいと教えてくれたので、影響を受けて似顔絵を描くようになったんですよ」と言ったら、先生は、「そんなことあつた？」つて言つてたんだけど、そのころは子供の雑誌の編集顧問をやつてて、『ひろば』という雑誌に清水さんとぼくの対談企画を出してくれてね。メチャクチャに緊張した。対談の写真を見ても先生と生徒つて感じてしよう（笑）。そのとき、君は似顔絵をどこから描き始める？ と訊かれて、ぼくは輪郭から描いて中を埋めます、と言つたら、そうか、ぼくは真ん中から描いて輪郭を描いてるな、つて。それであとから真似しようかと思つたけどもう慣れてたからうまくいかなかった。対談中にお互いの似顔絵を描く、という趣向があつたんだけど、清水

さんも、うまくいかないなあ、つてことで、二人とも持ち帰つて描いたけどね」

和田さんが絵やデザインを仕事にしたい、と考えるようになったのは、高校二年のころだという。

「世界のポスター展というのを見に行つて、ヨーロッパのポスターがとってもよくて、それからですね、こういうのを作る人になりたい、と思つたのは。まだグラフィック・デザインなんて言葉も知らなかった。それで多摩美（大学）に入つて勉強して、自由課題で映画のポスター描いたときに似顔絵が役に立つた」

美大卒業と同時に西銀座にあるデザイン会社、ライト・パブリシティに入社した和田さんは、新宿日活名画座のポスターに映画スターの似顔絵を描く仕事をかなり続けたが、絵を入れるのは和田さんの勝手、ということでは画料は出なかった。その事情は『銀座界限ドキドキの日々』（和田誠）に詳しいが、この

和田さんが似顔絵の面白さを知ったのは清水崑さんの絵を
みてからで、その清水さんとの対談。緊張が伝わってくる



本の文庫版の解説で井上ひさしさんがこう書いている。

「お読みになれば、彼の人柄もお分かりになるのではないでしょうか。ここでは彼の青春時代が扱われていますが、その時分から彼はお金を取らずに仕事をしていたことがわかります。つまり彼はお金で仕事をする人じゃなく、仕事を愛するがゆえに仕事をする人なんです」

和田さんと映画スターの似顔絵に関わる話はいろいろあるが、高校二年のころ、ジェームス・スチュアートに似顔絵入りのファンレターを出した、という話にも後日譚がある。

「東京国際映画祭の第一回るときだから、今から二十年前くらいに、ジェームス・スチュアートを主催者側が招んだんだね。それで週刊朝日がぼくに、対談しますか？ って言うってきたんで、するする、って喜んで出た。高校生のころ、彼の返事をもらっててからね、

ぼくは。世界中からいっぱい手紙くるだろうにさ。その返事に、ぼくの『ハーヴェイ』のときの似顔絵を描いてくれて有難う、って。ハーヴェイという映画は大きな兎が見える頭のおかしい男の話。それから、あなたには才能があるようにお見受けする、って書いてあった。そりや嬉しかったですよ。その手紙を読んでお前はイラストレーターになったんだ、って決めつける友だちもいるくらいでね。で、対談のときにその手紙を持ってって見せたら、こういうのを見ると昔を思い出して楽しいですね、なんて言ってくれるの。映画の中の彼と同じタイプのあったかい感じの人だった。ぼくが自己紹介で、あなたの『踊るアメリカ力艦隊』のときに生まれました、って言ったら、一九三六年だね、ってすぐにわかって。それから『スミス都へ行く』の話になって、ラスト近くで長い長い演説を彼がするでしょう。正義漢の若い政治家がアメリカの憲法を十何時間も読んで時間稼ぎをする。あの

ときだんだん声が噎れていくのが真に迫ってただけで、どうやったんですか？　って訊いたら、よくぞ訊いてくれた、みたいになっちゃってさ。ちっとも声が噎れてこないのはなぜなんだ、って監督に言われて、悩んだ挙句、咽頭科の医者に飛び込んで、声を悪くしたいんだけど、と言ったら、ハリウッドにはいろんな気違いがいるけど、お前みたいなやつは初めてだ、って（笑）。それでスポイトでポンポンと薬を垂らしてくれたら、声がうまく噎れたんだって」

私も中学生のころにあの映画を見て、ひどく感心したシーンがあった。冒頭近く、これから主役を演じるらしい俳優が、退屈な演説を聞いてフワーツと出るあくびを何とか噛み殺そうとするところ。日常の何気ない動きを映し出されて、二時間近くも観客を引きつけていけるパーソナリティ。それが映画スターか、と思ったものだ。

ところで和田さんでもいつも似顔が気に入

アメリカの俳優ジェームス・スチュアートと。和田さんの似顔絵の才能を認めた一人だ



歌手、岸洋子さんと。多才な和田さんが作曲した歌を岸さんが歌っている

られるとは限らない。マレーネ・デートリツヒのときがそれだった。

「ああ、その話ね。彼女が歌の公演で日本に来たとき、彼女の似顔絵が出てるぼくの本を持ってつて、これにサインしてください、つて頼んだら、似てただけど本人はどう思ったのか。これは私ではない（ザット・イズ・ノット・ミー）って書かれちゃった（笑）。まあそれもいい記念になってるけど」

和田さんの肩書きというか、活躍のジャンルというのか、じつに多岐にわたってしかもみんな一流なのがすごい。デザイナーとして画家として、たとえば『週刊文春』の表紙を三十年近くも描いているし、芝居などのポスターはすぐ盗まれるほどの人気だし、物書きは和田さんに装丁してもらえるのを無上の光栄としている。翻訳家としてはみごとな脚韻（日本語で！）を踏んだ『マザー・グース』の名訳があるし、作家としては絵本からエッ

セイから多くの著書がある。映画監督としては第一作の『麻雀放浪記』で「すでに彼は、はつきりと自分のスタイルを打ち出しています。そんな映画作家はじつに稀」であり、「レオナルド・ダ・ビンチみたいな人」（井上ひさし）ということだ。監督としての和田さんについてはのちに書くが、その上にまだあった。

作曲家としての一面についてふれたい。

なんと、『眠りの国へ』というCD、十数編の子守唄（高橋睦郎作詞）に和田さんが曲をつけ、あの岸洋子さんが歌っているのだ。

「洋子さんとはうんと若いころからのご近所づきあいなの。彼女が一つ年上。芸大音楽科に通っていて、本当はオペラ歌手になりたかったんですけど、持病が見つかってオペラはあきらめてね、エディット・ピアフのレコードを聴いたのがキツカケでシャンソンを歌うようになったらしい。これから御茶の水のジローに歌いに行くの、というときにぼくは道

で遭っている。そのままぼくがついて行けば彼女のデビューに立ち合えたのに、行かなかったのは残念だった。で、ずっとたってからぼくが作曲した十七の子守歌の譜面を見せたら、いいんじゃない？　いつか歌ってあげるわ、って言うてくれて、いろいろ経緯があつてまたずいぶんたってから自費出版みたいにしてLPレコード五百枚作つて、友人に配つたりしたんですよ」

実は、私はその数少ないLPレコードのほうの『眠りの国へ』を聴いている。私の友人がなぜかそれを持っていて、これから和田さんにインタビューで会う、と言つたらテープに取つて送つてくれた。

聴いてみると、趣味がよくて品格のある和田さんの絵の世界に一脈通じる静かな曲が流れてきた。

「昔のLPを持ってるって、相当のオタクの人だねえ（笑）。LPのレコーディングの直後に洋子さんが故郷の山形で膠原病で倒れて

入院してるときにテープを聴いて、これが私の最後のレコーディングになるかもね、って。とにかくぼくの自費でLPを出してから十九年後にやっとキングレコードがCDにしてくれたんです。そのときに声の調子のよくないのを一曲はずして出たんですよ」

和田さんのこの音楽の才能は、「日本の効果音の父」と言われた父君和田精氏のDNAによるのだろうか。

「さあどうかね。でも父は耳がよかったのはたしかですよ。映画の『第三の男』で、オーソン・ウェルズが下水道の中を逃げまわるシーン。カットが変わるたびに水の音が変わる、というのを聴き分けてて、あとでぼくが観て感心したことがあつた」

そしてこの耳のよさは、和田さんの長男に受け継がれた。

「息子が生まれて、やっぱり和田家の男は一字の名前にしようと思つて、唱^{しやう}。次男が率^{りつ}。上の子が初めて描いた絵が二重丸みたいな、

どうもドーナツ盤のレコードを描いたらしか
った。ぼくが子供のころに描いた絵を母がち
やんととっておいてくれたということがあつ
て、ぼくも唱の絵をとっておいたんだけど、
彼は歌う人になってレコードも出してゐるから
ね。名前のせいかも知れない。率のほうは数
字に強くて、そういう仕事になったしね」

個性豊かな和田さん一家のもうじきの楽し
いできごとは、奥様の平野レミさんが久々に

CDを出すこと。

「聴いてみたらなかなかのものなんですよ。
『私の旅』というんだけどね、ぼくが作詞作
曲したものが一曲、訳詞したシャンソンとか、
全部ぼくの詩で十四曲。彼女は料理する人と
か、お笑いの人に思われてるフシもあるけど
(笑)、元々歌手だからね。ちゃんとやるとち
やんと歌える。久しぶりにシャキツとしたか
みさんだった」

(つづく)

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-2-45231

念仏して往生するに不足なしといいて、悪業をもはばからず、行すべき慈悲をも行ぜず、念仏をもはげまざらん事は、仏教のおきてに相違するなり。たとえば父母の慈悲は、よき子をもあしき子をもはぐくめども、よき子をばよろこび、あしき子をばなげくがごとし。仏は一切衆生をあわれみて、よきをもあしきをもわたし給えども、善人を見てはよろこび、悪人を見てはかなしみ給えるなり。

〔念仏往生義〕

「念仏さえ称えれば往生に不足はない」などと言つては、悪事さえもはばからず、なすべき慈悲の行を实践もせず、まして念仏に励まないようでは、仏教の定めに反するといふものです。たとえば、父母は慈悲の心で良い子も悪い子も同様に育みますが、良い子のことは喜び、悪い子のことは嘆き悲しむようなものです。同じように、み仏はあらゆる人々を哀れみ、善い人も悪い人も仏の世界へ導き渡して下さいますが、善人を見ては喜び、悪人を見ては悲しまれるのです。

「行すべき慈悲」——阿弥陀さまに喜んでいただく日暮らしを——

福岡県筑前町の中学二年の男子生徒がいじめを苦に自ら命を絶ちました。いじめは、この生徒が中一の時の担任教師の心ない発言がきっかけでした。担任教師は、生徒の保護者から相談された内容を教室で不用意に話してしまったり、友達の消しゴムを拾ってあげた生徒に対し、「偽善者にもなれない偽善者」とからかっていたといえます。そればかりかこの担任は、自殺直前、この生徒が自嘲気味に「死にたい」と友達に漏らしていたことを耳にしながらも気にとめず、自殺直後、遺族に詰め寄られた際には、「からかいやすかったから」と答えたそうです。

また、北海道滝川市の小学校では、昨年の九月、六年生の女子児童が、自分の教室の天井に備え付けられたスクリーン台に紐をかけて首をつり、意識不明のまま今年一月に亡くなりました。この児童が教卓に残した七通の遺書が明らかに、六年生全員に宛てた手紙には「私がいなくなっただけで済んだでしょう」「みんなは私のことがきらいでしたか？」と書かれていたそうです。

いったいこの子供達は、どんな思いで「死にたい」と友達に打ち明けたのでしょうか、どんな思いで多くの遺書を書き綴ったのでしょうか。そして、最後の朝食の席でどんな思いで家族と会話を交わしていたのでしょうか、最後の「いってきます」という言葉をどんな思いで口から振り絞ったのでしょうか。

そんなことを考えるだけで、言いようのない悲しみと無力さが胸に込み上げてきます。

いじめによる子供達の自殺をはじめ、追い詰められて行き場を失った方々の自殺が後を絶ちません。いったい、そうした方々の悲しみに真剣に耳を傾け、その悩みをしっかりと受けとめて、共に悲しみ、共に悩んでくれる方が、なぜそばにいてあげられなかったのでしょうか……。

大乘仏教で説く慈悲は、「拔苦与楽」といって、すべての人々の苦しみを除き、ゆるぎない真の幸せを与え続けるという実践です。もちろん法然上人は、「本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬなり（中略）助と申すは、智恵をも助にさし、持戒をも助にさし、道心をも助にさし、慈悲をも助にさすなり」（『禅勝房伝説の詞』）と述べられているように、私たちがお念仏を相続するにあたり、智恵の体得や戒律の保持、菩提心を発することなどと同様、慈悲の実践を浄土往生のための必要条件とすることはありませんでした。そうした慈悲の実践を全うすることなど、私たち凡夫には修め切れるはずがないことを既に阿弥陀さまはお見通しであり、そうした阿弥陀さまの思いを法然上人がお汲み取りになったからに他なりません。

しかし、その一方で法然上人は、冒頭のご法語を通じ、最終的に「慈悲を行じられた・行じられなかった」という判断を下されるのは阿弥陀さまご自身であって、そうしたみ仏のご判断と、仏教徒であれば誰しもが「行ずべき慈悲」を「行じようとする・行じようとしない」という私たちの心がけとをむやみに混同することを強く戒めておられるのです。法然上人は、わが子に向ける父母の心情こそ、慈悲の実践に他ならず、私たち凡夫も、たとえそれが満足なものではなくとも慈悲の一端を担うことは可能であり、その実践に真摯に取り組む私たちの姿勢こそ何より大切であると仰っています。なるほど阿弥陀さまは、わが父母のごとく、大いなる慈悲の心で分け隔てなく誰しもを救って下さいます。しかし、お念仏の相続を通じ、そんな優しく慈しみ深い阿弥陀さまのみ心を素直に受けとめられたならば、私たちは自身の心のありさまを見つめ直さずにはいられなくなり、阿弥陀さまに喜ばれるような慈悲に満ちた日暮らしを自ずから心がけることとなるのです。

そうした意味で私たちは、浄土往生を目指してお念仏を相続すると共に、すべての家庭に笑顔が満ち溢れることをも願って、どれほど微力であろうとも「行ずべき慈悲」を心がける日暮らしを送ることが大切なのです。合掌（林田康順）

江戸を歩く

第一回

大江戸ウォーカー
森清鑑

江戸の玄関、高輪・三田

芝浜の波打ち際を南に歩くと、行き止まりが鹿島神社。波が押し寄せる石垣。祭りの芝囃子は遠くまで聞こえた。海の安全を願う漁師の神社である。神社と隣り合わせに石垣がさらに海に突き出す形で、鹿児島藩の蔵屋敷があった。敷地六千坪。舟で江戸湾に運んだ鹿児島藩の物資を蔵に横付けし、搬入する処である。ここで勝海舟と西郷南州の江戸無血開城最後の談判が行われた。現在の第一田町ビルに記念碑が立っている。

勝海舟と西郷南州

勝海舟は、近世希に見る、評価すべき人物である。彼は、「真の精神」を貫いた。維新という大革命が成し遂げられた時、結果として最小限の犠牲者を出すに止まったのも海舟の功績といえよう。世界の革命の歴史の中で、類を見ない快挙であったともいえる。混乱の渦中で示した、海舟の方向性の正しさは、その後の歴史が証明している。

しかし、海舟亡き後、数十年。軍部が横行し、第二次世界大戦では、日本を塗炭の苦しみ追いやった。この時、もし、彼がいたら、このような愚拳は避けられたかも知れない。平和な徳川二百六十年。そして近代国家への脱皮。受け手の徳川の、身分低い、一介の家臣が大きな道筋をつけたのである。このようなことは、無私の心が無ければ、到底、成立しない。

勝麟太郎、海舟は、文政六年（一八二三）本所、深川亀沢町（現在の墨田区両国。両国公園に海舟生誕の碑が立っている。安政三年の古地図では男谷精一郎宅になっている）に生まれた。曾祖父は米山検校。旗本、男谷家おだにの株を買い、徳川幕臣となる。祖父は男谷平蔵。その三男が海舟の父、小吉で勝家（旗本）に養子入りした。この小吉という人は破天荒な生き方をした人で、相当な剣術使いであった。このことは子母澤寛の「勝海舟」や「親子鷹」にくわしいが、彼自身も「夢酔独言」を著し、生き生きとした江戸弁で当時の世相を描いている。困った問題に巻き込まれた、近隣の□

人々を放っておけずに直接対決。さながら、時代劇の主人公を地で行った人で、頼りにされた人であった。本家からは「幕末の剣聖」と称された、男谷精一郎（幕府講武所、頭取、剣術師範）が出てい

る。年は離れていたが、海舟の従兄弟いとこに当たる。直心影流の達人で、なにしろ門下から島田虎之助、榊原健吉さかきばらけんきちという二大名剣士を輩出した。男谷精一郎は申し込まれた試合は一度も拒まず、江戸で立ち合わなかった者はいないといわれるほどであったが、いかなる強敵も退け、底知れぬ実力といわれた。温厚な人格者としても知られ、常に相手に花の一本をとらせる。「君子の剣」と称されている。海舟はこの精一郎から剣の手ほどきを受ける。そして後に高弟、島田虎之助（天保の三剣豪）に師事。後年、海舟は「本当に修行したのは剣術である」と述べている。氷川清話によると、「島田虎之助の塾へ寄宿して薪水しんすいの労をとって修行した。寒中（真冬）になると、



「江戸名所図会」鹿島神社。
右が芝浜。左が薩摩藩蔵屋敷石垣。

師匠の指図に従つて、道場での稽古がすむと、夕方から稽古着一枚で、王子権現で夜稽古をした。拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思、心胆を鍛錬し、立って木剣を振り、また礎石に腰を下ろす。これを夜明けまでに五、六回繰り返し、それから帰って朝稽古をやり、夕方、再び王子権現に出向く。これを一日も怠らなかつた」。王子権現といえば、両国橋から谷中を抜け、江戸時代の王子川沿いに歩いたとしても大変な距離である。しかも鼻を摘まれても分からぬ暗闇の中を行く。「夜中に境内の樹木が風の音に鳴る。思わず身の毛がよだつて、大木が頭上に倒れてくる錯覚も覚えた。しかし、これも修練を積むにつれ、趣おもむきに変わった。時折、門下生が同行することもあつたが寒さと眠さに辟易して権現にたどり着く前に、民家をたたき起こして寝るのが常だつた」。こうして海舟は、直心影流の免許皆伝を得る。島田はまた、剣術の奥義を極めるには禅学を始めよ、と勧めた。そして二十才から四年間牛島の広徳寺で修行する。海舟は、「幕府瓦解、維新の難局に処して余裕を持

てたのもこの二道の賜である」と語っている。島田という人は面白い人でこれからの世は蘭学だと海舟に勧める。赤坂溜池の永井青崖に弟子入り。猛勉強をし、本所から赤坂田町に移る。やがて佐久間象山の知遇を得て、西洋兵学を修め、私塾（蘭学と兵法学）を開く（後に日本統計学の祖となる杉亮二が塾頭となる）。一八五三年、ペリー来航。開国を要求されると、老中阿部正弘は、海防に関する意見書を広く求めた。海舟も意見書を提出。阿部は、海舟の意見を取り立て、大久保一翁を紹介する。江戸城無血開城もこの大久保との二人三脚の結果である。その後、長崎伝習所教官。オランダ人教官と伝習生の意志疎通を果たす。オランダ語が生きた。当時の√計算などの数学ノートは、驚くべきものである。薩摩藩主島津斉彬の知遇を得る。そして斉彬から西郷のことを聞き及び、神戸海軍操練所時代に西郷と会い、互いに深く肝胆する。

一方の西郷南州は、英味な鹿児島藩主、島津成彬に低い身分から見いだされ、鍛えられ、中枢に

登り、官軍を指揮して江戸に向かっていた。その前に、海舟は、弟子、坂本龍馬を西郷に紹介する。薩摩から帰って来た龍馬に海舟は「どうだったかえ」と聞く。龍馬の回答が面白い。「なるほど西郷という奴は、分からぬ奴だ。少しくたたけば少しく響き、大きくたたけば大きく響く。もしばかなら大ばかで、利口なら大きな利口だろう」。やがて土佐十五代藩主山内容堂が龍馬の「舟中八策」を元に、大政奉還を慶喜に建白。慶応三年大政奉還が成る。龍馬の薩長連合。王政復古の大号令。慶応四年（一八六八）の戊申戦争。官軍東海道を登る。浜松で海舟の知友、山岡鉄舟が海舟の親書を携えて西郷と会談。官軍は品川に来る。海舟と西郷は、薩摩藩中屋敷、愛宕山で会談。愛宕山は海拔二十六メートルと小高い丘だが、当時江戸市中を見渡せた。海舟はいう。「これがみんな燃えてしまうような愚は避けたい」。海舟は幕府軍を抑えるとともに、浅草、町火消しの大頭領、新門

辰五郎に「江戸の民衆がさわがぬように」依頼。そして、西郷南州との最後の会談に挑む。海舟はたった一人の従者を連れ、まるで東海道を散歩するかのごとく、金杉橋を渡り、芝浜の海を眺めながら、薩摩の蔵屋敷に着く。丁重な出迎え。座敷に上がると、周囲には襖を隔てて、薩摩藩の家来が抜刀の準備をしている。やがて西郷が着流しでひょうひょうと座敷へ。正座していた海舟が、ことの決着を静かに語ると、西郷は一言「よく、わかり申した」。これが、江戸百万人が救われた瞬間である。彰義隊が上野寛永寺に立てこもったために、広大な寺社は灰燼に帰した。増上寺は無事であった。官軍幹部は安堵して増上寺を利用することになる。



江戸開城会見の碑

浄土誌上句会

●大根

〔特選〕千し大根雲の流れの速きこと

佐藤 雅子

何本もの葉の付け根を縄で束ねて、稲架^{はさ}に吊したり木の枝などに掛ける。家で使う分なら軒下に吊せばよい。日照りが続いてほしいし風の加勢もありがたい。雲の速さはそれらを満たしてくれているのだろう。

〔佳作〕大根のとりりと煮えて人の来る

鈴木真理子

大根蒔く手のひら程の菜園に

山口 信子

峰々の雨雲去りぬ大根蒔く

井村 善也

●露

〔特選〕登山道の細き矢印萩の露

大西 明子

萩に置いているのは朝露だろう。出発してまだそれ程の高さには達していない。矢印の細い板が行く先を示している。これから先、

幾つもの細い矢印を見失わないようにしながら、頂上を目指して行くのである。

〔佳作〕露しとど供華切りに出て裾濡らす

金谷 友江

芋の露まろく小さきもの愛す

十条 苑を

露じめり精気戻りし畑のもの

浜口 佳春

●自由題

〔特選〕
帰省とは無縁に生きて墓洗う

寺下 忠至

日本列島に盆の帰省という大移動がある。

過疎の村も、この時と正月ばかりはにぎやかになる。作者はそこに生まれ育ち、身内たちも多分土地を離れていないのだろう。静かに盆を迎えているのである。

〔佳作〕お多福の横顔知らず酉の市

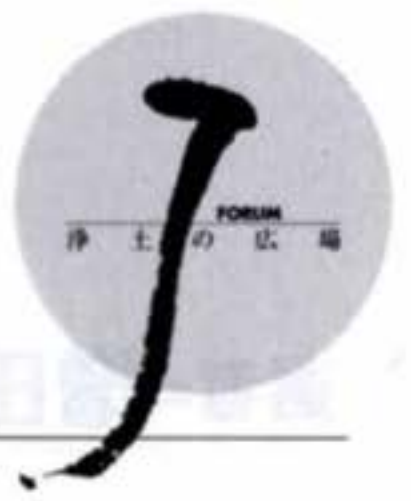
和田 仁

熊手買う有料老人ホーム様

井口 栞

塩利きし鰯の干物の眼が澄みぬ

東 保



大根

みどり葉の更に彩る大根漬け 河合富美枝
 右も左も大根簾敷塚路 金谷 友江
 大根炊く寸の輪切に自負すこし 片桐てい女
 大根の煮方を記せし母ノート 中島富士子
 大根生ふ畝の歪みに沿いしまま 伊藤寿美子
 懸大根伊勢の海より風もらい 浜口 佳春
 千大根皺刻むほど味深む 石原 新
 半分の大根で足る夕仕度 増田 信子

露

四天王の憤怒あらわに露の秋 河合富美枝
 緋衣のお披露目となる秋の宵 佐藤 雅子
 露せしや朝刊とりにポスト迄 中島富士子

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

薄氷

梅

自由題

締切・二〇〇六年十二月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年二・三月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

自由題

露しとど死刑を越ゆる刑はなし 片桐てい女
 鐘撞きて屋根よりぼとり朝の露 工藤 浄真
 裏戸から露びつしりと家囲む 山口 信子
 朝露に手を変込みて茗荷採る 井村 善也
 露深き山野に残る獣跡 増田 信子
 芋の葉にしばらく遊ぶ露の玉 吉崎美和子

コスモスのひとむら優し美術館 河合富美枝
 念仏の木魚響けり秋の空 佐藤 雅子
 秋思濃し濡れて寄り添ふ道の神 中島富士子
 うつすらと初雪の声や利尻富士 工藤 浄真
 参道をはづれて静か八つ頭 袴田 阿形
 はんぺんを噛めば初冬となりけり 十条 苑を
 肌寒やセーラー服を吊す家 大山 東人
 冬猫のこんもりとして珈琲屋 山王 吾郎
 老眼鏡掛けて蒔きいし大根種 浦田 ちゑ
 普段着に着替え落ちつく菊日和 池田 伊吹
 十三夜最終船に僧も重り 直田 豊人
 情性にて綴る日記や夜の秋 石井 正
 紅蜀葵沖のまぶしく風ぎにけり 北川 弘子
 酔客を送り白露の家となる 坂下 優子

さっちゃんね

36 かい

かまち♡ふらう



編集後記

十八という数だけに年惜しむ

岱潤

先日保護観察協会の人たちと神奈川の少年院を訪れる機会を得た。

少年院には初等・中等・特別・医療の四種類があるそうだが、この少年院は医療少年院ということだった。もちろん医療といっても内科や外科の症状の少年ではなく、精神科ということになる。しかしここは軽度の知的障害の子が三割弱で最も多く、発達障害や、不安障害の子、てんかんやADHDの子などだそうだった。

彼等の刑期はほぼ十一ヶ月で、その間に心理療法や作業療法といったカリキュラムをこなし、毎日ドリル学習や運動、陶芸や絵画などで自分を見つめ、模擬売

店などで社会性を養い、時には薬を貰い、自己改革・精神的改善に取り組んでいるとのことだった。

前に何度か訪れた一般的な刑務所では、刑務所は心の改善や教育を行うところではなく刑罰に処するところ、刑罰とは強制労働であるという説明を何度も聞いてきたし、川越の少年刑務所は技能取得学校だったことを考えると、ここはそれほどしっかりしているように思えた。今の日本では心を病んだ人間は改善の見込みがあるが、心も病まないような者は、変わる見込みもないということなのだろうか。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十八年十一月二十日

発行 平成十八年十二月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※「シネマ随想」はお休みさせていただきます。

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3 月合併号で通巻 800 号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は 1700 名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800 冊以上、総 35000 ページあまりの貴重な財産を PDF 化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在 400 冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊『浄土』検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果から読みたい『浄土』を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすれば PDF ファイルが表示されます。お読みいただくには PDF ビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF 一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

これを機会にお近くの一人でも多くの方々に月刊『浄土』をお勧めいただき、法然上人鑽仰会の会員にご勧誘いただければ甚だ幸いに存じます。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



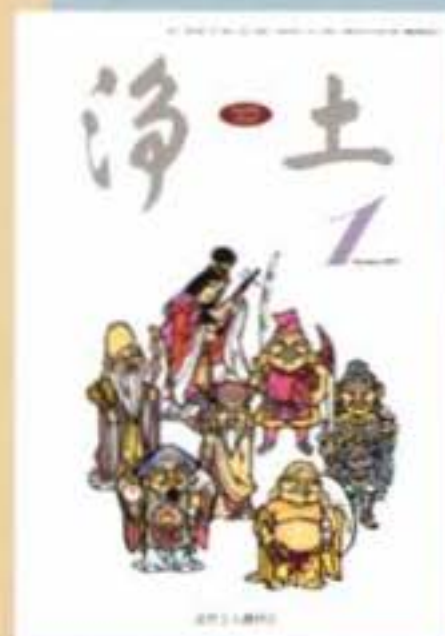
委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

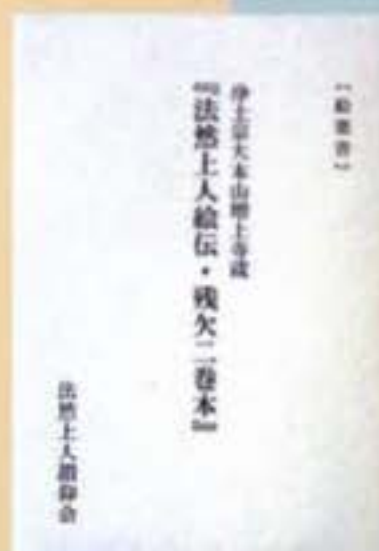


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036